

第1回京神3大学土壌研合同セミナー 「大学間交流で拓く土壌研究の最前線」開催報告

木田森丸¹・柴田 誠²・中尾 淳³

大学教員が事務負担の増大や学内資金の減少など様々な問題を抱えているのは事実であり、前途ある若者を遠ざけている要因にもなっていると思われる。ただし、工夫次第で魅力的な仕事が展開できる(働きがいがある)立場でもあることは意外と知られていない。社内決裁を取らなくても組織外に仲間を作り、活動を始めることが出来るフットワークの軽さは、実は日本社会では結構貴重である。このような、大学教員ならではの恵まれた環境を活かした実践を増やしていくことが、ボトムアップでの大学の活力再生につながると信じ、その参考になり得る例を以下に紹介したい。

師走半ばの2022年12月17-18日に、神戸大学土壌学研究室、京都大学土壌学研究室、京都府立大学土壌化学研究室が共催する初の試みとして、第1回京神3大学土壌研合同セミナーを開催した。開催のきっかけは、今年度9月に開催された日本土壌肥料学会2022年度東京大会のミニシンポジウム「若手研究者が魅せる土壌肥料科学研究の最前線」後の親睦会である。たまたま席を同じくした3名(木田、柴田、中尾)が相互交流の必要性について意気投合し、開催に向けた調整が始まった。

開催地は京都市北西部の京北地域に立地する京都府立ゼミナールハウス「あうる京北」にした。神戸からはやや距離があるものの宿泊費用が2,000円(学生)、4食込みでも約6,000円と割安であること、JR二条駅から無料送迎バスが出ていることなどが決め手となった。参加者は計29名で、内訳としては神戸大学から教員1名学生12名、京都大学から教員1名学生5名、京都府立大学から教員1名

学生9名であった(写真1)。上は博士後期課程、下は3回生と幅広い学年構成となった。

12月17日の11時にJR二条駅に集合し送迎バスにて目的地に向かった。移動時間は約1時間と短めだが、山道でカーブが多いため車酔いをする学生もちらほら見られた。到着後まずは昼食を済ませ、ゼミ室へ移動。13時過ぎから簡単な自己紹介を行い、緊張をほぐして場の空気を和らげた後で、まずは教員からの各研究室紹介を行った。各教員共通のメッセージが「他流試合の重要性」である。3研究室(というか3教員)には土壌学という共通基盤がありつつも得意な技術や興味のある対象は大きく異なる。その事を教員同士は認識しているが、学生はどうだろうか。学会発表ベースの交流だけではそれを自覚し辛いのが現状ではないか。土壌学ならではの共通言語(例 CEC=cation exchange capacity)があることでの話しやすさとともに、意外と共有できない言語(例 MAOM=mineral-associated organic matter, RIP=radiocesium intereception potential)があることを体験して世界観を広げてほしい、自らの秀でた部分も足りていない部分も自覚し刺激を受けてほしい、そして交流を楽しみ研究へのモチベーションにつなげてほしい。そういう思いが三者三様のアプローチで熱く語られた。

この後、17日の午後から18日の正午まで学生の発表が行われた。発表数は計12題で、内訳は神戸大学から4題、京都大学から5題、京都府立大学から3題である。発表と質疑応答を聞き、各大学に抱いた印象は以下の通りである。神戸大学チームはアウトプットを明確に意識した緻密な研究計画に基づく体系的な指導が行われている、有機物に関して土壌中の現象のみならず広く環境中での動態を捉えることに果敢に切り込むことを学生自身がもがきながらも楽しんでいる(柴田)、強力な共同研究のネットワークを構築し、多様な分析・解析技術を駆使することで土壌有機物の先端研究を展開している。また学生自身がデータの背景にある化学現象をよく理解している(中尾)。京都大学チームは日本人が少ないながらも全員のアクティブさと意識レベルが極めて高い。また、熱帯地域を主戦場としてフィールドに強い(木田)、学生一人一人が高い志を持って研究室を選び、自ら試行錯誤しながら研究に取り組んでいる。また、生命・環境としての本質を問う質問が多く、洞察の深さに驚かされた(中尾)。京都府立大学チームは、

Morimaru KIDA, Makoto SHIBATA and Atsushi NAKAO:
Report on the 1st joint seminar "Frontiers of Soil Research
through Inter-University Exchange" between three Universities in Kyoto and Kobe

¹神戸大学大学院農学研究科(657-8501 兵庫県神戸市灘区六甲台町1-1)

²京都大学大学院地球環境学堂/農学研究科(606-8502 京都府京都市左京区北白川追分町)

³京都府立大学大学院生命環境科学研究科(606-0823 京都府京都市左京区下鴨半木町1-5)

Corresponding Author: 中尾 淳 na_4_ka_triplochiton@kpu.ac.jp

2023年1月11日受付・2023年1月17日受理

日本土壌肥料学雑誌 第94巻 第2号 p. 152~153 (2023)



写真1 合同セミナー終了後に撮影した集合写真

学生の教育レベルが高く、グループとしてまとまっている。土壌鉱物を研究の軸として力強い研究が展開されている（木田）、一貫した研究テーマに取り組むために自分以外の学生の研究に対する理解が深く、学生同士の議論が日常的に行われている強みがある、おそらくそれに付随して資料作成の技術に関する情報交換も盛んで発表の質が揃って高い（柴田）。教員の立場でも、普段の学会発表では時間的に質問を控えていた内容なども多く聞くことができ有意義であった。また参加した学生からも、あまり堅苦しくない雰囲気、研究の話だけでなく他愛のない話もできてとても良い交流の場だった、「土壌学研究室」でも、大学ごとにやっていることが結構違ったのが驚きだった、セミナーを機に新たな共同研究が始まる予感がした、もっと時間が欲しかった（神戸大学）、土壌学分野の日本人学生の多さに驚いた、同世代と土壌や農業への多様な関心をやり取りできたのが良かった、他大学の教員とフランクに交流し研究への向き合い方を聞けて刺激になった、大学ごと

の特徴を感じ、自分の所属だからこそ経験できること・学べること（研究に限らず）が明確になり、残りの時間をより有意義に過ごせるよう工夫しようと思った（京都大学）、統計など勉強しなければならないことが多いことに気づかされた、新しい研究視点を知ることが出来た、他大学の学生の普段の研究の様子を何気ない会話の中から伺うことが出来た、質疑応答の時間がもっと長いと良かった（色々聞きたかった）、要旨があると理解が深まると思った（京都府立大学）といった感想があり、開催の収穫が大きかったと実感できたと同時に、より有意義な場にするための改善点も見つかった。3教員とも第2回の開催に意欲的であり、早速意見交換を進めているところである。

最後に、今回このような会を催すことが出来たのは、日本土壌肥料学会東京大会を対面開催して下さった運営事務局の皆様、ミニシンポジウムを主催されたメンバーの皆様のおかげであることを感謝したい。